



戸津

1983.3

小松市教育委員会

戸 津

1983.3

小松市教育委員会

凡　　例

1. 本書は、昭和57年度において実施した製材所建設工事にかかる開発行為に伴う戸津古窯跡群の発掘調査概報である。
2. 調査は昭和57年度国宝重要文化財等保存整備事業費補助金及び石川県の埋蔵文化財保存事業補助金の交付を受けて、小松市教育委員会が事業主体となり実施した。

調査年度及び担当者は以下のとおりである。

昭和56年度	第Ⅰ次調査	詳細分布調査	小村 茂 宮下幸夫 久生秀樹
同	第Ⅱ次調査	A地区調査	小村 茂 宮下幸夫 久生秀樹
昭和57年度	第Ⅲ次調査	B地区調査	小村 茂 宮下幸夫 久生秀樹 五十嵐正登

3. 調査にあたっては、地主上田喜義、谷本伊一郎の両氏及び柳津田建設の協力を得た。記して感謝の意を表したい。
4. 調査の実施及び概要報告書の作成にあたっては、石川県教育委員会文化課及び石川県立埋蔵文化財センターの指導を得るとともに、以下の方々の絶大な御協力と御指導を得た。記して謝意を表したい。

井上喜久男 上野与一 小野正敏 久樂善通 小嶋芳孝 小森秀三 斎藤孝正
桜井甚一 田島明人 田嶋正和 田中照久 植崎彰一 服部敬史 橋本澄夫
浜岡賢太郎 東 泰三 三上次男 水野九右衛門 谷内尾吉司 渡辺修平 吉岡康暢
渡辺幸貞 愛知県陶磁資料館 名古屋大学考古学研究室 奈良国立文化財研究所
福井県陶磁資料館
5. 本書は小村、宮下、久生の協議のもとに主に小村がとりまとめた。図版および写真撮影は主に久生、五十嵐があたった。



目　　次

I. 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
II. 調査の経緯	4
III. 遺構と遺物	5
1. 遺構	5
2. 遺物	17
IV. あとがき	30
V. 発掘調査日誌抄	33

第1図 遺跡の位置

表紙写真 遺跡上空からみた南加賀の丘陵と周辺地形



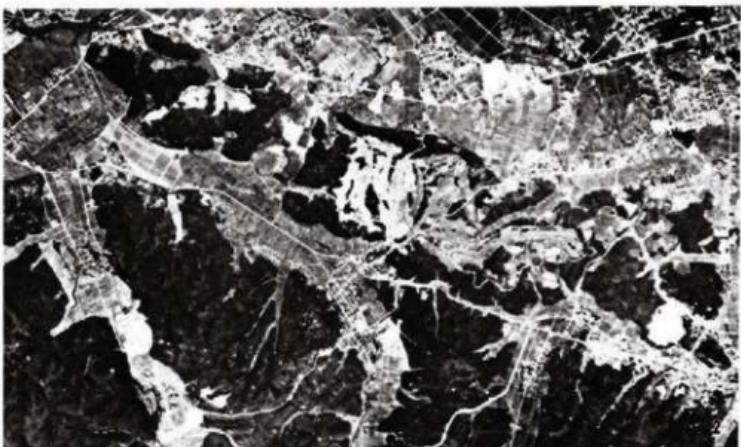
1. 陶製水煙

I 遺跡の位置と周辺の遺跡

石川県の加賀地域は白山大汝峰に源を発し、美川で日本海に注ぐ石川県最大の河川である手取川により北加賀と南加賀に分けられる。いわゆる南加賀地域は西に日本海、東に白山前山地帯を形成する能美・江沼丘陵にはさまれた狭延な地域で、南西で福井県に接した江沼盆地と、これに連続して東北方に広がる能美平野からなっている。この江沼盆地と能美平野の中間位置に加賀三湖（現在、木場潟・柴山潟の一部が残っている。）とこれによって形成された潟埋積平野が広がり、東南を白山前山地帯と境を接し、いたるところで小谷を形成している。栗津温泉は矢田野町付近から東南方に伸びる奥深い谷の中程にあり、今回の調査対象となった遺跡は栗津温泉より西方に入り込む一谷の中程、戸津町から二ッ梨町に至る県道に開口する小支谷の東南斜面に位置し、石川県小松市戸津町ヨの部に所在する。

白山前山地帯に平行して江沼盆地と能美平野を貫いて伸びる国道八号線と栗津松山地溝帶に沿って、栗津町より郡谷町を通り山代に至る県道津波倉・山代線にはさまれた標高約45m前後の低丘陵には古墳時代の須恵器窯跡を始めとして、埴輪窯跡・土師器窯跡及び器物窯跡と多数の製鉄址があり、これらを総称して南加賀古窯跡群と呼称している。

戸津古窯跡群が所在する戸津町とその周辺には奈良時代及び平安時代の窯跡が密集している地域であるが、最近古墳時代に遡る窯跡が発見されたことや土師器窯跡が集中分布することが判明したため、重要性について再確認する必要にせまられている。また近年の分布調査では本群を越えた標高100m級の山並みが連なる小谷においても室町時代に下る窯跡が発見されており、南加賀古窯跡群について再検討しなければならない。（久生）





第2図 周辺の主要遺跡 1戸津古窯跡群 2林

古窯跡群 3二ッ梨一貫山古窯跡群 4林八幡
神社経塚 5戸津5号窯跡 6戸津本蓮寺跡
7井口神社製鉄跡 8牧口中世墓跡 9西荒谷
カマンダニ古窯跡群 10豆岡山1号窯跡 11豆
岡山向古窯跡群 12殿様池古窯跡群 13二ッ梨
古窯跡群 14荒谷サンマイ谷古窯跡 15中村古
墳 16矢田野遺跡 17狐森塚古墳 18矢田新遺
跡 19矢田新丸山古墳 20無名古墳群 21打越
弥生遺跡 22打越繩文遺跡 23箱宮古窯跡群
24分校古墳群 25荒谷古窯跡 26奥谷古窯跡群
27那谷1号窯跡 28小天王谷古窯跡群 29大天
王谷古窯跡群 30カミヤ古窯跡群 31那谷遺跡
32那谷堤遺跡 33那谷タカラ跡 34毘谷桃の木
山1号窯跡 35那谷琴平山古窯跡群 36分校古
窯跡群 37栄谷A遺跡 38栄谷丸山古墳群 39
栄谷B遺跡

2.南加賀古窯跡群周辺の地形

3.戸津5号窯跡全景



II 調査の経緯

本調査の原因は、市街地にあった製材所が公害勸告を受け、その改善策として本古窯跡群の所在する丘陵を開発し製材所を建設しようとするものである。しかし開発が具体化し実行の運びとなった時点でも小松市教育委員会にはまったく協議もなされず、開発行為許可の仮申請すら協議されることなく市当局を通過してしまった。したがってかかる開発行為を察知したのはまったく偶然であって、この事態を重視した小松市教育委員会では事業者と折衝し、戸津古窯跡群の取り扱いについて協議した。その結果、工事の続行を中止するとともに詳細分布調査を実施した後に再度協議することとした。

詳細分布調査は昭和56年4月24日より同年5月14日の延15日間を充て、工事計画区域内に試堀溝を設定して実施したが、遺構の確認は須恵器窯跡が4基と瓷器窯跡1基であった。この結果をもとに小松市教育委員会では、遺跡の保護について事業者と再度協議した。しかし事業者は工事計画区域の変更が極めて困難であり、すでに土地の契約関係が成立している理由で工事の続行を要望してきた。そして工事計画を察知する以前にすでに削平された窯跡と周辺に露呈している土師器窯跡の保存調査を原因者負担により昭和56年5月23日から7月11日まで実施した。調査の結果は土師器窯跡8基と瓷器窯跡1基及び炭窯と思われる遺構1ヶ所が検出された。その後、再三にわたり遺跡の保存について事業者と折衝したが、現状での遺跡の保存が困難となり記録保存もやむをえないという結論に達したため、昭和57年度より3ヶ年に亘り本調査を実施することになった。

発掘調査は昭和57年5月6日より同年9月30日までの期間とし、小松市教育委員会が調査主体となり実施することとした。



III 遺構と遺物

1. 遺構

A地区（昭和56年度調査）及びB地区（昭和57年度調査）で確認された遺構は、須恵器窯跡10基、土師器窯跡16基及び瓷器系窯跡1基であった。A地区では8基の土師器窯跡を検出したが、昭和20年代に斜面裾が住宅造成のため削平されたので、窯跡の実数は不明である。他に南側斜面において瓷器系窯跡（加賀古窯跡）1基及び炭窯状遺構1基を確認している。

B地区では斜面下方の緩傾斜地で7基の土師器窯跡、斜面上方においては平行して築造された須恵器窯跡10基を確認したが、この付近も過去において果樹園の開墾があり、ひどく地形が変形していて窯跡の詳細な分布状況等は不明である（第10図）。



5

戸津15号窯跡 検出された土師器窯跡のなかで、唯一の煙道を有する窯跡である。窯体は主軸方位をほぼ東にとり、 $2.4\text{ m} \times 2\text{ m}$ の楕円形の平面プランを呈し、窯床をほぼ水平に構築している。煙道は長さ 2.2 m 、巾 0.6 m で、窯主軸線よりやや右寄りに設けられている。床面は窯体より約 1 m 程が水平になっており、さらに約43度の勾配で地上へのびている。層序より考えると煙道は操業中に設けられたことが理解できるが、これ自体が窯体である可能性も否定できない（第4図、写真5）。



6

戸津16号窯跡 15号窯跡の下方に隣接して構築された窯で、平面形は $2.5\text{ m} \times 1.96\text{ m}$ の楕円形に近い。窯床は水平で、窯壁は奥壁が高さ約50cmを残しており、窓下方が開口している。他の土師器窯跡もこれには近い形状をもっている（第4図）。



7

戸津17号窯跡 平面形は $1.93\text{ m} \times 2.12\text{ m}$ の隅丸方形である。窯壁の遺存状態は良好であり、奥壁の立上りは約75cmを計る（写真6）。

戸津18号窯跡 17号窯の下方に構築された窯で、 $1.8\text{ m} \times 1.35\text{ m}$ のやや不整形な長楕円形の

4. 昭和57年度B地区調査風景

5. 戸津15号窯跡全景

6. 戸津17号・18号窯跡全景

平面プランをもっている（写真6）

戸津19号窯跡 1.5 m × 0.9 m の隅丸方形の平面プランをもっている。開墾時に削平されたため、壁の遺存状態がわるい（写真7）。

戸津20号窯跡 2.25 m × 1.53 m の楕円形の平面プランをもっている。窯床はほぼ水平であるが、一部破壊されているため全容は不明である。壁は窯上半に遺存していたが奥壁で高さ32cmを計測した。窓内より黒色処理した土師器塊・皿が出土している（第3図、写真8）。

戸津21号窯跡 17号窯と19号窯との中間位置に構築された窯であるが、窯床の一部（焼土面）を確認しただけで窯体の詳細は不明である。

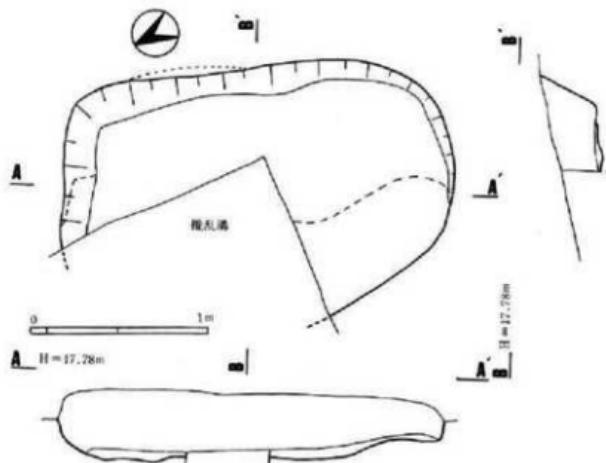
戸津22号窯跡 19号窯の左下方に位置する土師器窯跡である。窓内の焼土がほとんど剥落していたため、掘り方だけを残しているように見える（写真9）。

戸津23号窯跡 調査が進展した結果、2基の窯体が検出されたため上方の窯跡をI号窯跡、下方窯をII号窯跡として区別した。I号窯跡は2.4 m × 2.5 mで、平面形は不整形な形状を呈する。II号窯跡は最大巾2.54mで、奥行は削平崖のため現存長1.4 mを残すだけであった。床面傾斜はI号窯跡がほぼ水平であったが、II号窯跡が約9度の勾配をもつていた（写真10）。

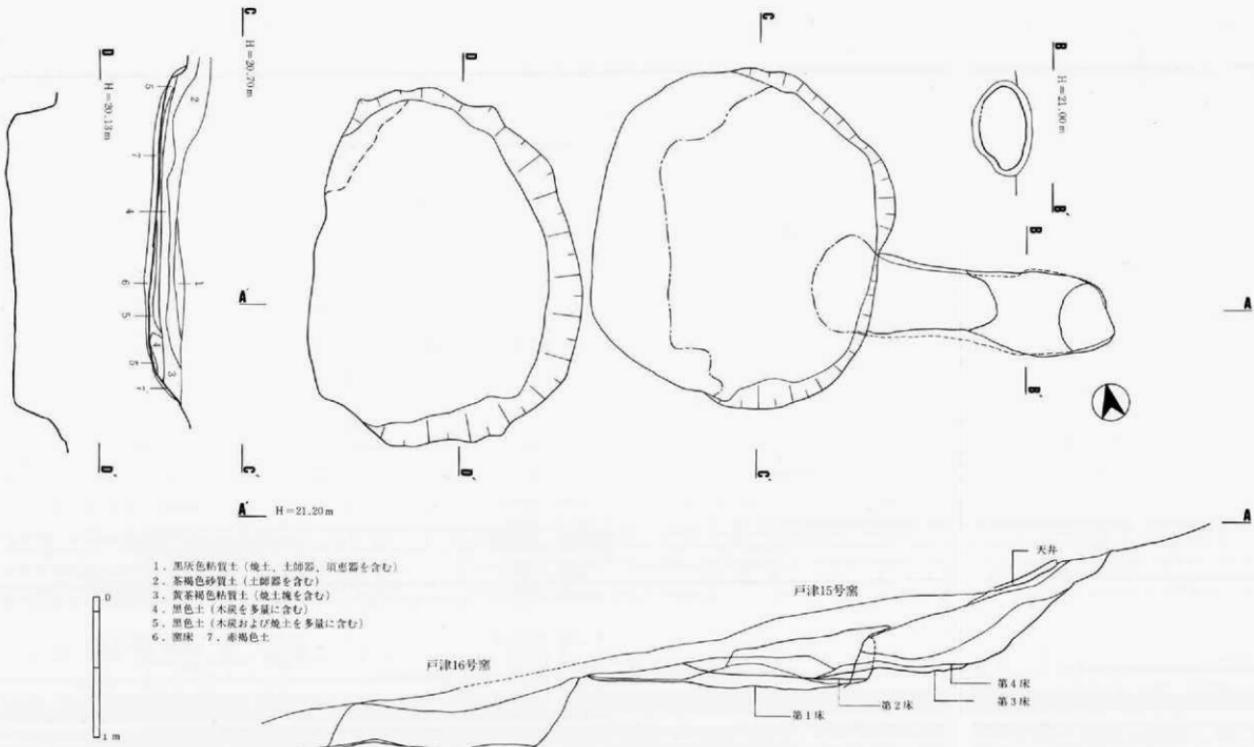
戸津26号窯跡 2.5 m × 1.57 m の楕円形のプランをもつ。床面傾斜は約9度である。壁は傾斜角や形状が不均一で、構築時の粗雑さが窺える。

戸津27号窯跡 2.27 m × 1.56 m のほぼ楕円形を呈する。窯壁は窯上半に構築されているが、かなり削平されているため窯体の詳細は不明である（写真12）。

戸津32号窯跡 土師器窯跡のなかで最も高所に位置し、戸津30号窯跡（須恵器窯跡）の



第3図 戸津20号窯跡実測図



第4図 戸津15号窓跡、戸津16号窓跡実測図



灰原に構築された窯である。左右両壁上部にわずかに窯壁を残すが、堀り方が土師器窯跡に共通するところから一応土師器窯に分類した（写真13）。

以上、土師器窯跡について略述したが、戸津15号窯跡だけが煙道を有する特異な窯構造を採用しており、土師器窯を考える上において今後の検討課題である。

次に須恵器窯跡について概要を記すことにするが、ここで示す窯跡のすべては、昭和57年度調査で確認した窯跡であることと付記しておく。

戸津24号窯跡 窯全長8.6m、最大巾は窯尻より3.2m焚口へ戻った地点で約2.1mを計る。側壁下方には巾約13cm、深さ19cmの溝がめぐっており、焚口付近の堀り込みを通り、灰原へ約8.3m続いている。下部41cm×50cm、上部51cm×54cmの煙道が真直ぐに立上っている。窯床面は焚口より1.2mまで約4度の勾配で緩く下降し、さらに約19度の傾斜で窯尻に至っている（第5図、写真16）。

戸津25号窯跡 24号窯跡に隣接して確認された窯跡である。窯全長約5.2mで、窯尻より2.2m焚口寄りで最大巾1.5mを計る。窯床面の傾斜は焚口より約19度で下降し、1.6m地点から勾配を転じて約32度で窯尻に至っ

7.戸津19号窯跡全景

8.戸津20号窯跡全景

9.戸津22号窯跡全景

10.戸津23号窯跡全景

11.戸津26号窯跡全景



12



13



14



15

12. 戸津27号窯跡全景 14. 戸津40号窯跡全景
13. 戸津32号窯跡全景 15. 戸津41号窯跡全景

っている。燃焼部及び焚口は、空体主軸よりわずかに左に折れている(写真16)。

戸津28号窯跡 窯全長8.2m、最大巾は焚口より3.4mの地点で約2mを計る。窯尻より3.3mに天井部が遺存していたので、窯床より高さ1.2mを計測することができた。さらに壁下に巾平均約18cm、深さ16cmの溝がめぐっており、焼成部中央に設けられていた舟底状ピットとともに奈良時代の窯跡に共通している。窓道は下端42cm×48cm、上端60cm×40cmではなく垂直に立上っている。床面は焚口より1.1mまで約7度で緩く下降し、あとは約16度の勾配で上昇し窯尻に至っている(写真17)。

戸津29号窯跡 窯全長6.5mで、焚口より約4.3mの地点で最大巾1.4mを計る。窯床の勾配は焚口より18度で下降し、焚口より3.5mの地点から約30度で上昇している。燃焼部で高さ60cm、巾64cmと狭くなっているが、焼成部では急激に高さや巾が増している(写真



16.



17.

16. 戸津24号・25号窯跡全景

17. 戸津28号窯跡全景

18).

戸津30号窯跡 29号窯に平行して築造されており、窯構造や規模は29号窯跡に近い数値を示している。窯全長は8mで、最大巾は焚口より約4mの地点で1.85mであった。床面傾斜角は焚口より燃焼部にかけて約5度で緩く下降し、窯尻より3.5mの地点から上昇し約30度の勾配で窯尻に達している。燃焼部に数度の修復が認められた（写真19）。

戸津31号窯跡 窯体先端が開墾のため削り取られており、窯体现存長8.8mを残していた。窯最大巾は焼成部中央付近で1.8m、焚口巾約1m。燃焼部及び焼成部に天井が残存しており窯の全体規模が推測できる。燃焼部高0.6m、焼成部高1.24m。窯床の傾斜は焚口で18度であり、焚口付近が最も深く、ここより約25度の勾配で窯尻に続いている。焼成部中央右壁にかなり大規模な修復が認められる（写真20）。

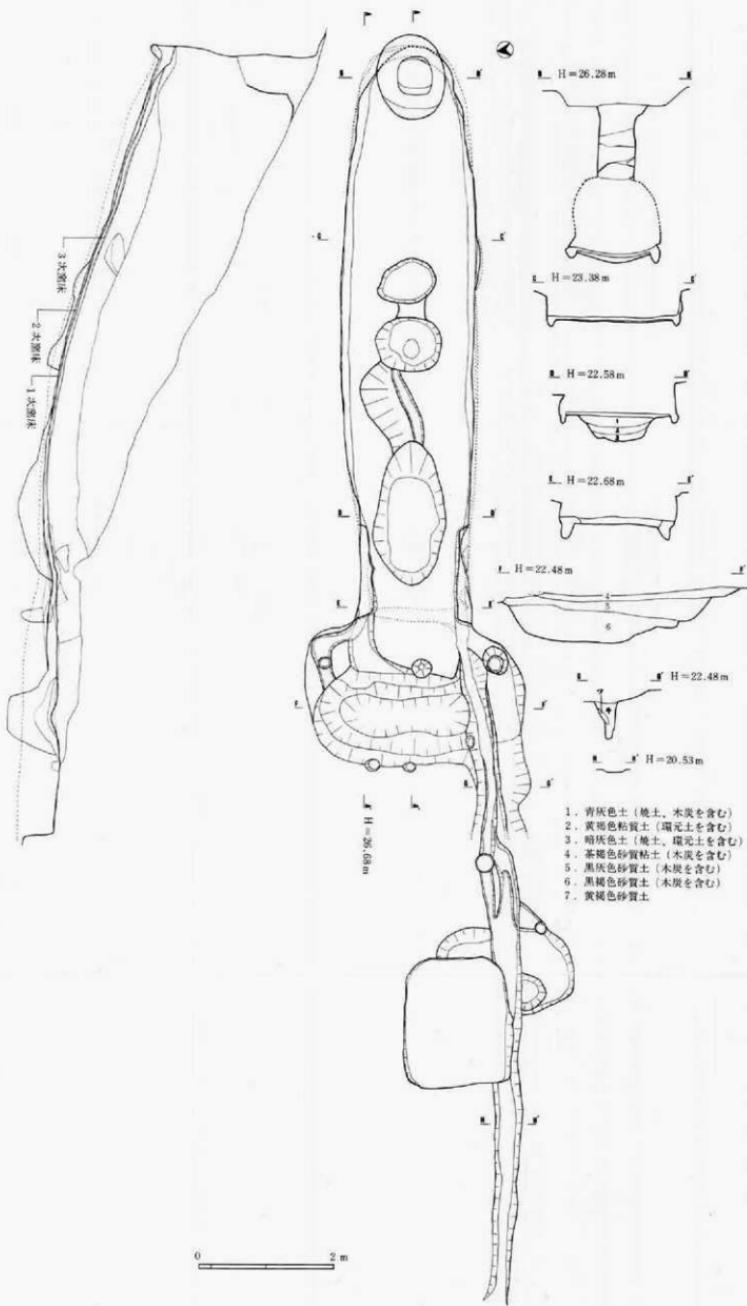
戸津33号窯跡 窯尻が開墾のため削平されており、窯全長は不明であるが、4.4m程が残存していた。焚口巾は比較的広く約1.2mで、燃焼部にかけて徐々にすばまり、焼成部にかかる部分が最も狭く0.75mであった。床面傾斜は、焚口から燃焼部にかけて概ね水平に近く、最終勾配約22~24度で窯尻に至る（写真21）。本窯跡の下部に戸津39号窯跡及び戸津43号窯跡が確認されているが、未調査のため割愛する。

戸津42号窯跡 窯全長は4.22mで、焚口より2.4mの地点で最大巾1.27mを計る。床面は焚口より16度の勾配で下降し、焚口より1.6mの地点から約55度で反転上昇し窯尻に至る。焼成

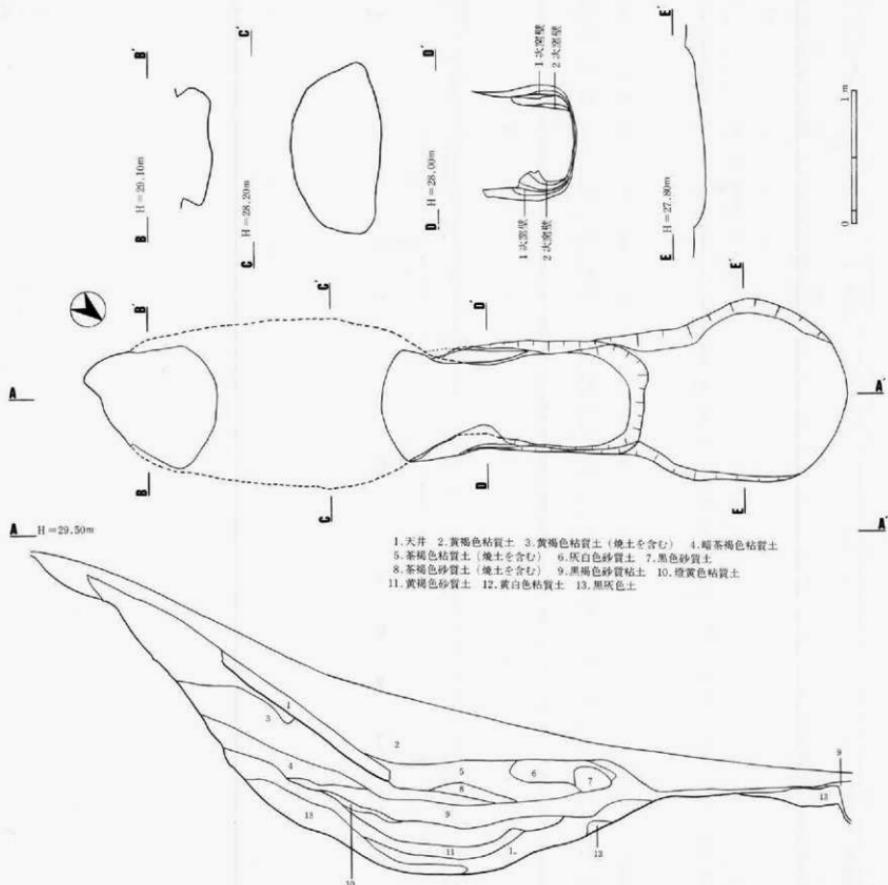
部には天井が良好に遺存していた。窯尻はわずかに欠損しているようであるが、現窯尻より約1.85m焚口寄りで高さ68cmであった。焚口から燃焼部にかけて数度の修復が認められた（第6図）。以上で須恵器窯跡の記述を終えるが、狹少な地域に須恵器生産と土器器生産が同時に行われていたことは、平安期における窯業史に多くの問題を提示している。



18. 戸津29号窯跡全景 20. 戸津31号窯跡全景
19. 戸津30号窯跡全景 21. 戸津33号窯跡全景



第5图 卢洋24号勘探井剖面图



第6図 戸津42号古墳実測図

2. 遺物

A地区及びB地区で検出した遺物は、土師器及び須恵器であるが、各窯跡の出土遺物の構成については、別表（表1. 土師器窯跡出土土器器種別分類表、表2. 須恵器窯跡出土土器器種別分類表）に示したとおりである。器種の分類名称については、次のような細分を試みた。

口縁部が逆「く」の字状を呈し、糸切り平底のものを甕A類とし、長胴甕を甕B類とした。甕A類については成形・調整技法等においてほとんど差異が認められないため、法量の差により口径11.3cm、底径7cm、器高10.2cm前後の甕類を甕A I類とし、口径16.4cm、底径8.8cm、器高16cm前後の甕を甕A II類としてグルーピングした。

皿類は高台の有無により、高台を有する皿A類と高台をもたない皿B類に分類したが、表2の皿C類は底部丸切りの盤を小形にした形状をもつものを一括した。塊類についても皿類と同様に塊A類、塊B類に分類した。蓋類については鉢をもつ蓋A類と、鉢のない蓋B類に区分した。次下、窯跡毎に出土土器の概略を記述する。

戸津15号窯跡出土土器 出土した遺物のすべてが土師器であり、器形全体を窺えるものは僅かであった。窯体内より皿B類、塊B類、甕A・B類及び塊類が出土している。前項において本窯が土師器窯跡のなかで唯一の煙道を有する窯であり、それ自体窯体の可能性をもつものと考えたが、煙道内平坦面の機能や灰層の形成状態もこの証左となろう。なお煙道内平坦面及び周辺のピットより甕A類が出土している（第7図-9、写真22）。

戸津15号窯跡出土土器 15号窯跡出土土器とほとんど同一であり、わずかに塊A類が新

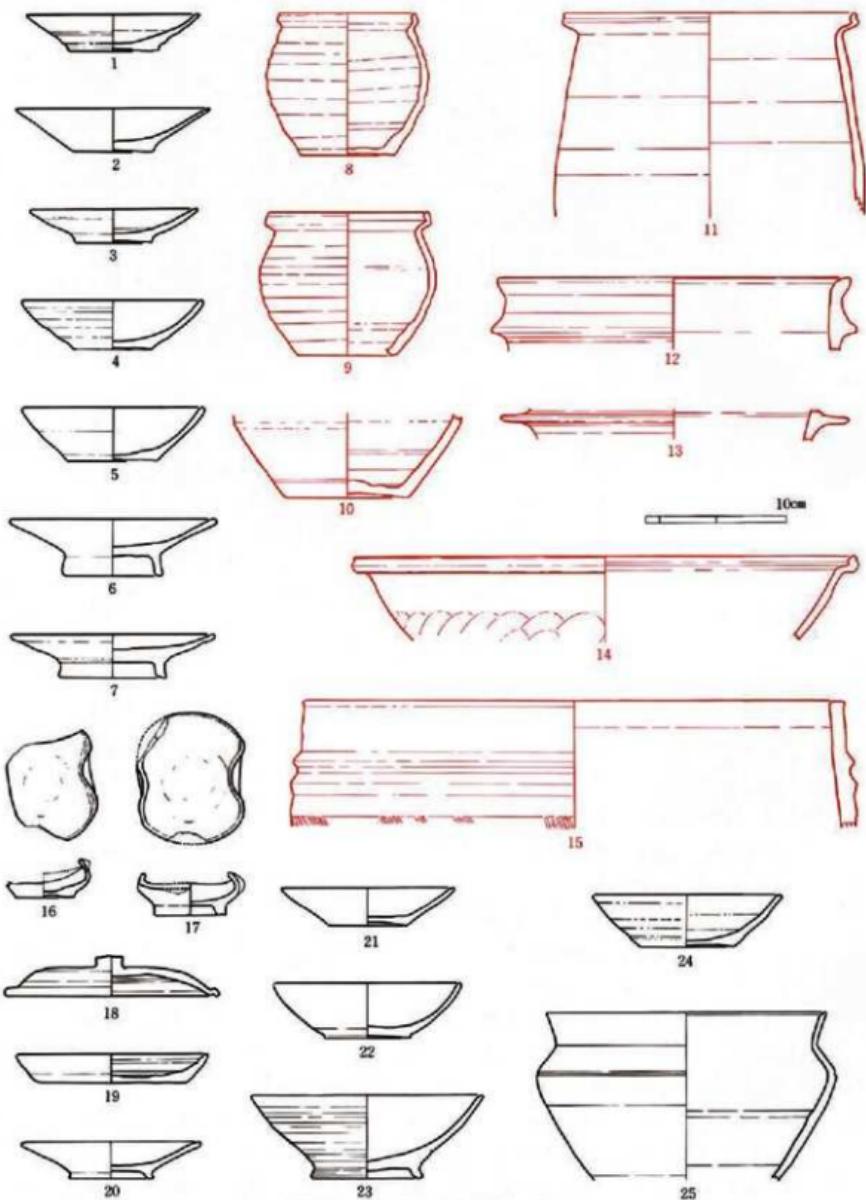
表1 土師器窯跡出土土器器種別分類表

器種 分類	皿A	皿B	塊A	塊B	甕AI	甕All	甕B	塊	羽釜	土瓶	甕
15	-	○■	-	○	○	○	○	○	-	-	-
16	-	○	○■	○▲	○	-	○	○	-	○	-
17	-	○	○■	○■	○	○	○	○	-	-	-
18	○	-	○■	○	○	○	○	○	-	○	○
19	-	-	○■	-	○	-	○	-	-	-	○
20	○	-	○■	○	○	-	○	○	-	-	-
21	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
22	○■	-	○■	○■	○	-	○	○▲	-	○	-
23-I	-	-	○	○	○	-	○	○	-	-	-
23-II	○	-	○	○	○	-	○	○	-	-	-
26	○	-	○■	○	○	-	○▲	○▲	-	○	-
27	○	-	○■	○■	○▲	-	○▲	○	-	-	-
32	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
40	○■	-	○▲	○■	○▲	-	○▲	-	-	○	-
41	○■	-	-	○▲	○▲	-	○	○	-	-	-

■内黒、▲後彩

たに加わっている。土師器窯跡出土土器は、各窯跡でほとんど差が認められないでの、器種構成については表1を参照していただきたい。

A地区第1号溝状遺構出土土器 皿A類は口径14.6cm、底径7cm、器高4.1cmの比較的高い高台をもつタイプ（第7図-6）と口径14.4cm、底径7.6cm、器高3.2cmで浅いタイプ（第7図-7）がある。前者は内黒赤彩土器である。皿B類は口径12cm、底径5.8cm、



第7図 A地区出土土器実測図



22

22. A 地区出土遺物

器高 2.5 cm 前後の法量をもち、口縁が心持ち内湾するもの（第7図-1, 3）と底部から直線的に口縁に至るタイプ（第7図-2）がある。両者ともに成形・調整技法に差異が認められず、底部外縁に成形を加えない点も共通している。塊類では、器形全体を窺えるものは塊B類（第7図-4, 5）に限られ、塊A類はすべて細片であった。他に甕B類及び壠・羽釜が出土している（第7図-10~15）。11は長胴壠である。口径20.7cm、胴部最大巾22cmで口縁の形状が塊A・B類に共通する。14は口径35.5cmで口縁形状が甕類に共通する。同様の形状をもつ須恵器壠が戸津42号窯跡灰層より出土している。

A地区第4号溝状遺構 戸津18号窯跡下部で検出した溝であるが、須恵器と土師器が混在していた。須恵器では口径28cmで球状に近い胴部をもつ壠のはか、蓋A類（18）、壠、塊A類（23）、皿C類（19）、長頸瓶、広口壺のはか、土師器皿A類（20）及び塊B類（21, 22）に共通するものがある。土師器では皿A・B類、塊A・B類、甕A I・B類が出土している（写真6）。土師器塊A類は法量の差異により、口径15.6cm前後のグループをI類、口径20.5cmのグループをII類として細分類できる。II類とした壠はすべてが内面黒色、外面が赤彩処理されている（写真29）。他に耳皿（第7図-16, 17）が出土している。

戸津24号窯跡出土土器 須恵器蓋A、壠、台付壠及び窯体内溝や窯壁に塗り込められた甕破片が出土している。蓋A（26）は口径16.8cm、高さ2.4cmで口縁が垂下する形状をもっている。台付壠（27）は口径15.5cm、底径10.7cm、器高4cmでやや肥厚に仕上げられている。壠（28）は口径13.8cm、底径9.6cm、器高3.2cm。器肉は厚く、底部より直線的に口縁に

至る形状を呈する。これらは二ッ梨一貫山2号窯跡出土土器（小村『二ッ梨一貫山須恵器窯跡発掘調査概報』1971）に共通しており、8世紀後半、奈良時代後期に比定できよう。

戸津25号窯跡出土土器 出土総数は概して少量であり、器種も壇A・B類、皿A類のほか双耳瓶、鉢が出土しているだけである。39・40は底部よりやや弯曲して口縁部に至る形状を有し、外展する低い高台をもっている、器厚はやや厚く、体部外面に水挽きによる凹凸をとどめている。戸津9号窯跡出土土器（宮下『戸津9号窯跡』1980）よりやや後出するものと考えられ、10世紀中頃の所産と考えたい。

戸津28号窯跡出土土器 器種構成や出土土器の形態も戸津24号窯跡出土土器と大差がない、窯構築年代も8世紀後半に充てたい（写真23）。

戸津29号窯跡出土土器 坩、皿C類及び双耳瓶が出土しているが、いずれも細片であり全体の器形を窺えない。9世紀中頃の所産と考えたい。

戸津30号窯跡出土土器 坩、皿B類、蓋A類及び広口壺が出土している。壺は口径12.4cm、底径7.2cm、器高3.4cm前後のものが一般的である。皿C類としたものは口径14.3cm底径12cm、器高1.8cm前後の法量をもつものである。戸津29号窯跡に近い年代を与えることが可能であろう。

戸津31号窯跡出土土器 最も遺物の豊富な窯跡である。窯床より出土した須恵器には壺、蓋A類、皿A・B類、広口壺などが出土しており、窯体内覆土より出土した須恵器には台付壺、蓋B類、皿A・B類、壇A・B類、高壺、双耳瓶、長頸瓶、徳利形瓶、瓶子、水煙及び宝輪が出土している。

窯床より出土した須恵器 坩は口径13cm、底径7.8cm、器高3.3cm前後の法量を示すものが多く、そのうち大半は底部より直線的に口縁に至る形状を有する。蓋A類は口径12.4cm器高3cmを計り、口縁部内面に範切りによる沈線をもち、小さな宝珠鉢を有する。皿A類で口径15.2cm、底径8cm、器高3.5cmを計るもののが法量では最も大きい。皿C類は口径14.3cm、底径11.6cm、器高2cmで、底部外縁が丸く仕上げられている。底部は範切りである（写真25）。

窯内覆土より出土した須恵器 台付壺はほぼ直立する高台から丸味をもって口縁部に至り、口縁端で僅かに外反する形状を呈する。口径17.2cm、底径8cm、器高7.2cmを計る。





24



25

23. 戸津28号窯跡出土遺物
24. 戸津31号窯跡出土遺物
25. 戸津31号窯跡床面出土遺物

蓋B類は法量の違いによりさらに分類できる。すなわち口径15.4cm、器高2.1cm前後のグループと小形で口径13cm、器高1.4cmのグループがある。戸津31号窯々床出土の蓋A類と調整技法及び形態ともに共通している。Ⅲ A類は口径14cm、底径8cm、器高2.8cm前後の法量をもつものが多いが、窯床出土の同類品よりも退化的な様相が窺える。

塊A類は口径16.5cm、底径7cm、器高5.1cmを計る。底部に糸切り痕をとどめ、高台の貼り付け後の調整が粗雑であり、内外面ともに水挽きによる凹凸を残している。塊B類は口径13cm、底径6cm、器高4.1cmで、焼成及び調整は塊A類より良好である(写真25)。

高环(44)は口径19.2cm、底径11.1cm、器高9.2cmで、身部は外方に緩く伸展する。肩部も緩く外展し、先端を丸く仕上げている。胎土に多くの砂量を含み焼成ややあまい。

双耳瓶(48)は口径17.3cm、底径11.8cm、器高34.3cmで、肩部は丸く仕上げられているが、口縁から頸部、頸部から肩部と直線的に成形されており、底部外縁を箇削りしているほか、胴部にタタキ痕をとどめ普遍的に使用されていた2~3条の沈線はまったく消失している。胎土に砂粒を多く含み、焼成やや不良で黄白色を呈する。

徳利形瓶子は口縁部が欠損しているため全体を窺えないが、頭部から底部にかけて球状に近い形状に仕上げており、胴部に3条の沈線を施している。焼成良好で胴部最大巾11.1cm、底径7.1cm(写真24)。瓶子は他に類品をみないものである。口径5.2cm、胴部最大巾17cm、底径11.5cm、器高17cm。

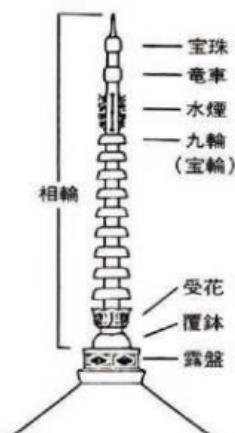
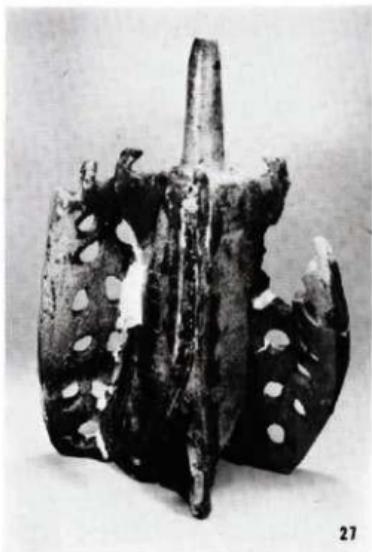
水煙は本調査ではほぼ完全に近いものが出土している(写真26)。他に数枚の羽根部が出土しており、複数個体が製品化されている。出土した水煙は4枚羽根型に属するもので、高さ69.7cm、全巾50.5cmで、先端に直径1cmの孔が穿かれている。心柱を受ける孔の下部内径20cm、上部内径12cm、深さ47.2cmで、高さ53.5cm、厚さ3.9cmの羽根に10ヶ所の透し孔を穿ち、上部に3本の突起を付して火煙を表現している(写真27)。

宝輪は絶数7個体が出土した。最大径の宝輪は下部孔径63.4cm、下部孔径20.6cm、高さ10.5cm、厚さ2.2cm。肩部全面にタタキ痕をとどめているほか全体に入念に調整が行なわれている(写真29)。小さな宝輪は下部孔径30.5cm、上部孔径15.5cm、高さ5.1cm、厚さ1.1cm。胎土にやや砂粒を多く含み、肩部に入念な箇削りを施している。最上部宝輪と思



26

われるものがある。7.3cmの縁帯から中心に向って緩く立上り、縁帯に径1cmの小孔を穿っている。器形全体を窺えないが、下部径約37.6cm、上部径16cm、器高20.7cmである(写真28)。以上の宝輪にみられる縁帯の小孔は風鐸を吊るすためのものと推測している。他に全長18.3cm、巾5cm、厚み0.8cmの範状陶板(写真30)が4枚出土して



第8圖 相輪模式圖

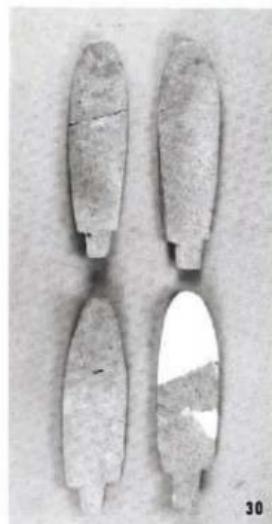
26. 水煙出土狀態

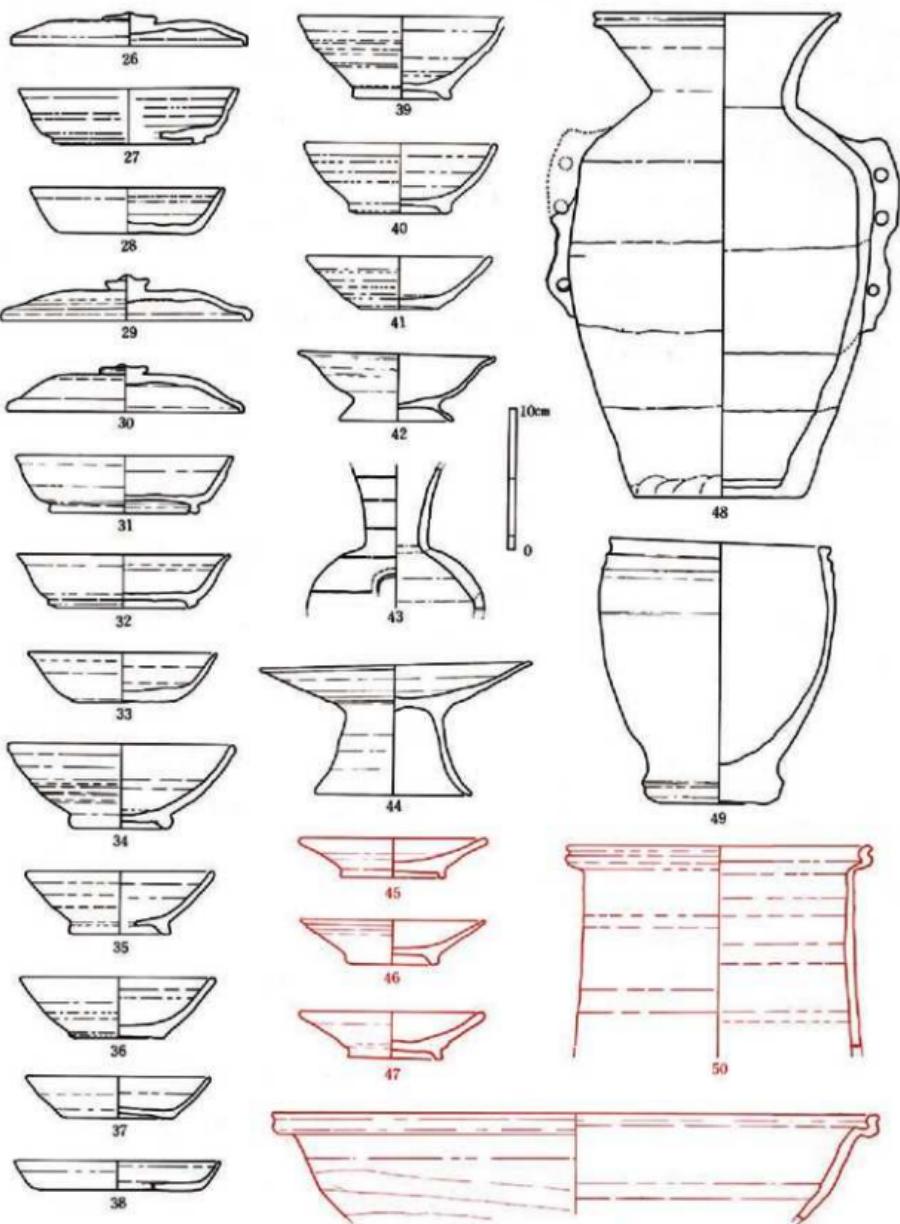
27. 水煙

28. 軸上部寶輪

29. 宝輪

30. 受花





第9図 B地区出土土器実測図

51

いる。先端は丸く、下端に巾 2.3cm 前後の突帯をもっており、全体に緩く弧を描いている。相輪にふくまれる受花と考えている。

戸津33号窯跡出土土器 窯体内より出土した遺物の器種構成は环、皿A・B類、塊A・B類、双耳瓶及び瓦である。

环（37）は口径12.8cm、底径 7.8cm、器高 3cm。焼成良好であるが、焼き歪みのため口縁部の外側が強くなっている。入念な調整痕をとどめている。皿A類は入念な調整が施されているが、焼成不良。口径13.6cm、底径 6.9cm、器高 3.4cm。皿C類（38）は口径14.4cm、底径12cm、器高 2.1cm。底部外縁を丸く仕上げており、焼成良好。塊A類は法量の違いにより 2 分類できる。いずれも水挽き時の強い挽き出しによる凹凸を残しており、肥厚した高台を有している。34は口径16cm、底径 6.8cm、器高 6.1cm、35は口径13.3cm、底径 7.2cm、器高 4.5cm である。塊B類は個体毎に調整技法にわずかながら差異が認められる。36は口径13.8cm、底径 6.4cm、器高 4.3cm で、器面全体を入念に横撫でしているが、底部外縁が未成形である。これに対し底部外縁及び外周に窓削りを施すものがある。

双耳瓶は器形全体を窺えるものがないが、器形の大きさはさまざまである。最も大きな双耳瓶は口径16.8cmで、胴部最大巾約23.7cmを計ることができる。頭部から胴部にかけて数条の沈線をめぐらしている。耳部に 3 孔を穿っている。窯床より焼土した窯道具は、馬爪形焼台と陶製焼台があり、両者が併用されていた。10世紀前半の所産と考えたい。

表 2 須恵器窯跡出土土器器種別分類表

番号	环	台付环	蓋 A	蓋 B	皿 A	皿 B	皿 C	塊 A	塊 B	双耳瓶	広口壺	長頸瓶	小壺	謫	高环	鉢	瓦	場
24	○	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	-	-	-	-
25	-	-	-	-	○	-	-	○	○	○	-	-	-	○	-	○	-	-
28	○	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	-	-	-	-
29	○	-	○	-	-	○	○	-	-	○	-	-	-	○	-	-	-	-
30	○	-	○	-	-	○	○	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-
31	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-	○	○	-	-
33	○	-	-	-	○	○	○	○	○	○	-	-	-	-	-	○	-	-
34	不 (未調査) 明																	
35	不 (未調査) 明																	
36	○	○	-	-	-	○	○	○	-	○	-	○	○	○	-	-	-	-
37	不 (未調査) 明																	
38	不 (未調査) 明																	
39	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-	-	○	○	○	-	-	-
42	-	-	-	-	○	-	-	○	○	-	○	-	-	-	-	-	-	○
43	不 (未調査) 明																	
44	不 (未調査) 明																	



31



32

31. 戸津38号窯跡出土小壺

32. 戸津39号窯跡出土遺物

戸津39号窯跡出土土器 窯床より环、皿A・B類、塊A・B類、蓋A類、長頸瓶、壺が出土している（写真31、32）。

环は多量に砂粒を含んだ胎土で、焼成不良のものが多い。口縁端が丸く肥厚につくられており、口縁外面では外反するが、内面はや、内凸ぎみになっている。口径13.2cm、底径7.9cm、器高2.8cm前後の法量をもつものが一般的である。皿類は形状の違いにより2分類できる。皿A類は外反する高台を有し、口縁端でさらに外へ開く形状をもっている。焼成良好なものが多く、全体に入念に仕上げられている。口径13.3cm、底径7cm、器高2.9cm。皿B類としたものは、口径14cm、底径10.9cm、器高1.9cmで、口縁の外傾度が緩いタイプが多い。塊類は台付塊と無台の塊に分類できる。前者を塊A類、後者を塊B類とする。塊A類は底部の小破片が1点出土しているだけで、器形全体を窺えない。底径6.4cm。塊B類は比較的小さな底部より弧を描いて緩く立上る器形で、底部外縁を入念にヘラケズリしている。底部に「/」を施している。口径12.9cm、底径6cm、器高4.2cm。蓋A類が1点出土しているが、薬壺の蓋と思われる。平坦な天井部から丸く肩部を形成し、口縁部は内側に傾斜している。天井部外面は鋭削りにより成形し、外面ともに入念に調整している。口径14.6cm、肩部最大巾15.2cm、器高7.8cm（宝珠鉢頂を含む）。

長頸瓶は2点出土している。外傾した高台を有し、球状に近い胴部をもつ。頭部は緩く外反している。頭部に2条、胴部に2条の沈線をもつ。全体に入念に調整が施されており、さらに胴部下半に入念な鋭削りを施している。口径10.8cm、胴部最大巾14.8cm、底径8.4cm、器高22.4cmを計る。

壺は大小合せて10点出土している（写真31）。形状は灰釉陶器の手す瓶を素形としているものと考えられ、すべてが法量及び形状に多少なりの差違がある。底部に糸切り痕をとどめるものが7点あり、他は糸切り痕を完全に消去している。

窯体内覆土の出土土器には环、皿A・B類、塊B類、蓋B類がある。

环は口径13.1cm、底径8.1cm、器高2.8cmで、器体が緩く立上るものが多い。胎土に砂粒を多く含むが、焼成は概ね良好である。皿A類は高台に大小の差異があるが、形状及び調整技法は共通している。口径13.4cm、底径6.4cm、器高3.3cmの法量を有するものが多い。皿B類は口径14.4cm、底径11.7cm、器高1.9cmの浅い形状をもつ。口縁端をさらに薄く仕上げるものが多い。塊B類は口径13.3cm、底径5.9cm、器高4.1cm。外面ともに入念に調整が施されているほか、底部外縁をヘラケズリにより成形している。蓋Bは法量の差異により2種類に分類できる。口径16.2cm、器高1.8cmの大きい蓋は口径に比して器高が低いので扁平な感じを受ける。天井部外面に「/」のヘラ記号をもつ。大小の蓋ともに調整は同様であり、焼成も良好である。

戸津42号窯跡出土土器 出土量は少量であり、塊A・B類、塊類があるが、土師器皿A類、塊B類も出土している。

47は口径13cm、底径6.6cm、器高3.4cm、黒色赤彩土器である。他に土師器塊B類が窯

床から出土しているが、これらについては検討課題として考察を後日に譲ることとしたい。

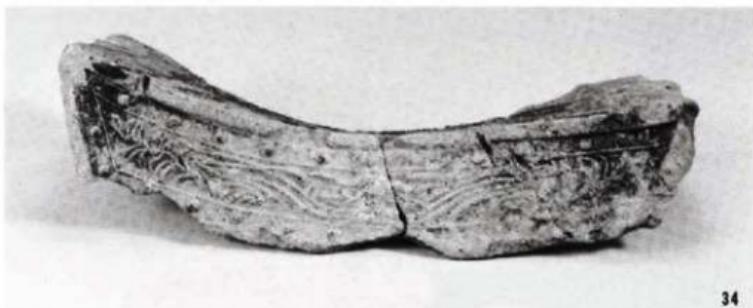
塊A・B類はすべて半完成品であり、半焼成のため黄白色の脆弱なものが多い。塊Aは肥厚で低い高台を有するものと外展し高い高台をもつものとに区別できるが、後者は半焼成であり、土師器との関係において今後よく検討しなければならないと思っている。塊Bは成形が粗雑であり、器壁の凹凸が激しい。なかには口縁端が内側へ返るものもある。塊は口縁部の小破片であるが、口径約36.6cmと復元できる。土師器塊51と口縁形状が類似している。

瓦類 瓦は軒平瓦、平瓦が出土しているが、軒丸瓦、丸瓦は確認されなかった。写真34は上弦長28cm、下弦長26.2cm、弦深3cm、中央厚5.5cmを計測し、界線で区画された外区に28顆の珠文がめぐり、飛雲状の中央飾りから派生する細隆線で表現される変形唐草文が内区一面に留延する。一方、写真35は上弦長28cm、下弦長26cm、弦深5cm、中央厚6.5cm（いずれも復元値）を計り、27顆の珠文と変形唐草文が入り乱れて表現されている。内外区を分ける界線は弦端にかろうじて残存しているが、細隠線で表現された変形唐草文の流麗さは表出している。戸津33号窯跡出土軒平瓦も上記瓦と同様のものである。

平瓦は弦幅上下共24.3cm、弦深3.4cm、厚さ2cm、側面長24cmを計測する破片（写真36）と弦幅上下共13cm、弦深0.6cm、厚さ1.1cm、側面長38cmを計る熨斗瓦（写真37）がある。写真36は両面ともに布目压痕をのこし、凸面では端部より15cm程の位置から小形の調整具ないし指頭によるナデ、箆状具によるケズリによって布目压痕を消去している。写真37は凸面に長軸にそって撚りの弱い繩目タタキを施し、指頭によるナデ、箆状具によるケズリによってタタキ目を部分的に消去している。凹面は全体に布目压痕を残しているが、両端に長軸にそって箆ケズリされており、粘土離ぎ目を指ナデした痕跡が残っている。ともに一枚造りの製品であるが、側面の仕上げは鋭く切断した個体が多い。今回の調査では、軒丸瓦が検出されなかったが、かって部分発掘が行なわれた時に出土した軒丸瓦について記載する。写真33に示した複弁四葉蓮華文軒丸瓦は、面径15.3cm（復元値）、瓦当厚約2.3cmを計測する。径3.4cmの中房に1+4の蓮子を配し、内区は中心隔線のない複弁と撥形の弁間を交互に配し、界線により区切られた外区に珠文20顆がめぐる意匠構成である。内面が破碎していく一本造りかどうか明らかでないが、瓦当につづく筒部の調整は入念で、長軸にそって幅2~3cmの箆状具による削りが加えられ稜をつくっている。この複弁四葉蓮華文軒丸瓦は前の変形唐草文軒平瓦や平瓦とセットをなすものと考えられ、戸津33号窯跡出土の土器が共伴していることを考慮すれば10世紀代前半の実年代を与えることができよう。以上で主な出土土器について記載したが、出土土器の量は頗大であって、すべての出土土器について目を通すまでには至っていないことを追記しておきたい。



33



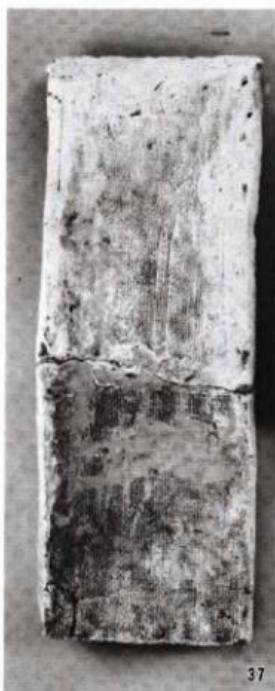
34



35



36



37

33. 檻井四葉蓮華文軒丸瓦
34. 变形唐草文軒平瓦
35. 变形唐草文軒平瓦
36. 平瓦
37. 平瓦（鬱斗瓦）

IV あとがき

以上戸津古窯跡群A地区及びB地区調査によって検出された遺構、遺物について記述したが、出土遺物に限ってみてもその出土量は膨大であり、十分な検討をなし得た訳ではなく、重要な成果とともに今後に残された課題も決して少なくない。これらを整理すると、まず第一に、土師器窯跡の検出である。確認された土師器窯跡は形状や規模にかなりの差異が認められるものの概ね奥行、巾とともに2m前後の楕円もしくは隅丸方形状の平面プランを呈し、窯床も水平もしくは9度前後であって平窯に属する。窯壁は斜面下方が開口し徐々に高さを増して奥壁で50cm以上、70度前後で立上る点など共通している。焼成時の天井については積極的に存在を示す資料となり得るものは確認されず、天井が構築されなかつたものと理解したほうが妥当であろう。

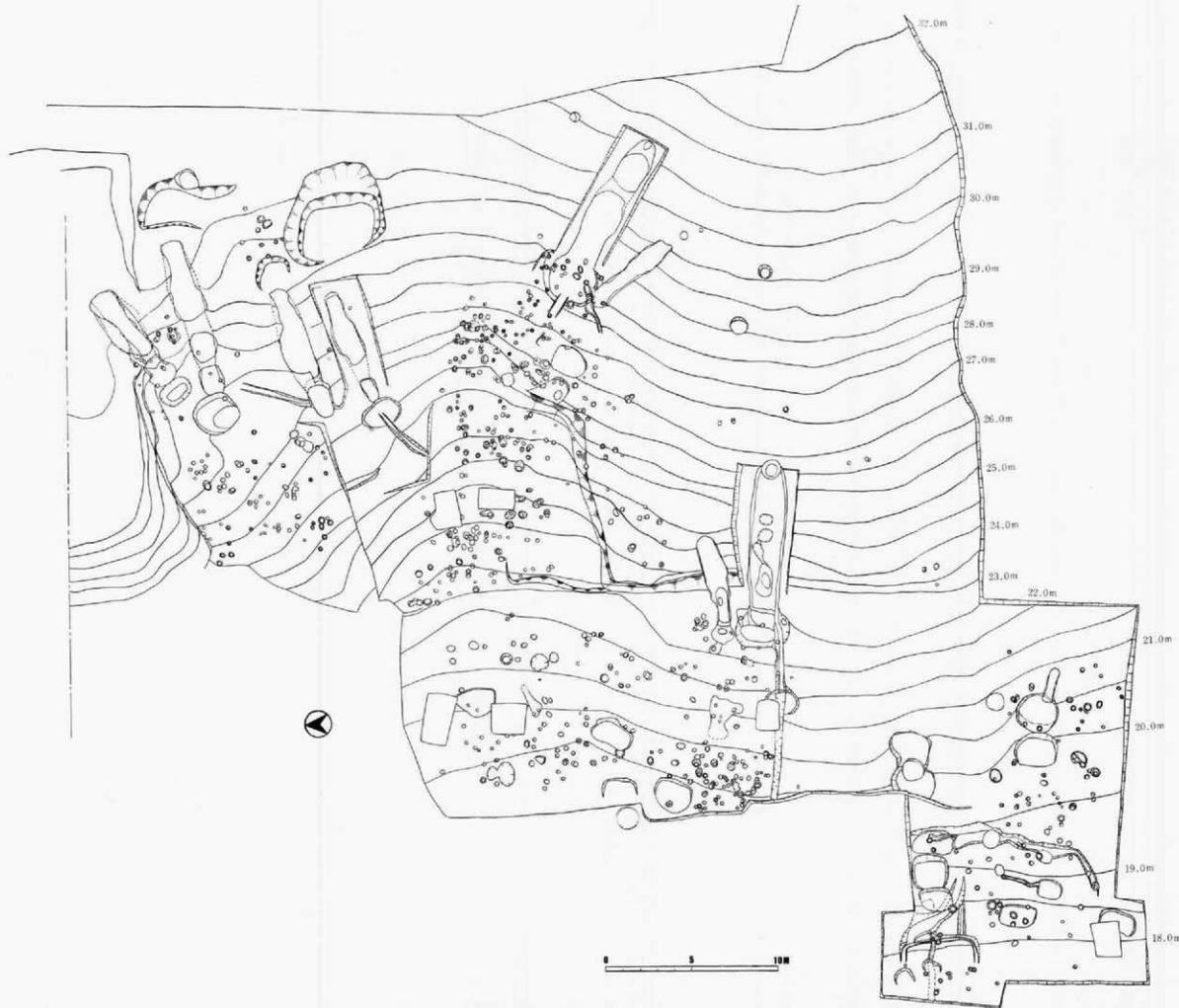
第二に、須恵器生産と土師器生産が狹少な地域で同時に進行されたことである。戸津古窯跡群の最盛期は須恵器や瓦の幅年から推察して9世紀より10世紀に至る時期であり、これと同時に丘陵裾において土師器生産も行なわれていたことが、須恵器と土師器に共通した形態をもつ塊・皿類及び甕C類の存在からも窺える。このことは須恵器工人と土師器工人との同化がすでに進行している結果と解することができようが、吉岡康暢氏がいわれる「煮沸形態に限定されていた土師器が供給形態の主体を占めるという土器生産の転換期」を現出する前段階を示唆するものなのか、須恵器と土師器の工人集団相互の在り方が今後問題となろう。次に須恵器や土師器にみられる顕著な糸切り技法の発達と灰釉陶生産の影響との相関関係を第三の問題としたい。すなわち平安時代に環元焰焼成の瓶鉢から生みだされた灰釉陶の生産技術が耐火度の低い陶土しかもたない当地の須恵器工人に受け入れられた結果、須恵器窯の著しい構造の変化と塊・皿類や手付瓶を素形とする瓶類、耳皿の出限を促したものと考えたい。糸切り技法の始源については9世紀代を通り得ないとする見解があるが、灰釉陶の影響と糸切り技法の問題については今後の課題としたい。



38

次に第四としては、須恵器生産終焉に関する問題がある。北陸の須恵器生産終焉期の標式となっている戸津4号窯跡は、その根柢となる須恵器の器種構成について複数の窯跡灰原の須恵器が使用されているため、次の調査をまって再考する必要がある。

調査の結果から得た問題点のいくつかを列記したが、さらに須恵器窯跡の変遷に関する問題や平安寺院への供給源としての瓦生産の問題などもある。いずれも想察によるものであり、詳細な検討は後日に譲ることとして、本書の記述について先学諸氏の厳しいご叱正をまちたい。



第10図 遺跡全体図

V 発掘調査日誌抄

第1次調査（昭和56年度）

- 4月24日 雑木及び下草の刈り取りを行なう。
4月25日 1号トレンチから設定順に掘り下げを開始する。
5月14日 23号トレンチ迄の全長 406.7mの掘り下げを完了する。



39

第2次調査（昭和56年度）

- 5月23日 焼土の確認された13号トレンチを中心一辺が10m程の方形グリッドを設定し掘り下げる。(I区)
5月26日 17号トレンチで確認された焼土を中心4×7mのグリッドを設定し表土を取り除いたが、遺構及びPitは検出されなかった。(II区)
5月27日 1~4号トレンチで確認された焼土、灰層を中心に11.5×7mのグリッドを設定し掘り下げる。(III区)
6月22日 I区で確認された13号窯及び14号窯の掘り下げを行なう。又これに並行してIII区の写真撮影及び実測を行なう。
7月11日 発掘作業を終了する。
- 7月27日 36号の平板実測を開始する。
7月31日 31号窯の窯体を掘り下げる。
8月4日 33号窯北側斜面の窯体確認作業を行なう。
8月6日 新たに5基の窯体及び煙道を検出する。(34~38号窯)
8月7日 30号窯の窯体を掘り下げる。
8月10日 31号窯の窯体を掘り下げる。
8月31日 33号窯に重複している窯体を確認し、窯体を掘り下げる。(39号窯)
9月2日 28号窯南側斜面に新たに窯体を確認し、窯体を掘り下げる。(42号窯)

第3次調査（昭和57年度）

- 5月6日 下草刈り取りを行なう。
5月10日 機械で堆土及び木根を除去する
5月28日 23~25、28号窯の窯体を掘り下げる。
7月5日 26、27号窯の窯体を掘り下げる。
7月6日 28号窯北側斜面の窯体確認作業を行なう。
7月12日 29号窯の窯体を掘り下げる。
7月14日 30~33号窯を確認し、33号窯の窯体の掘り下げから行なう。
7月20日 32号窯の窯体を掘り下げる。
- 9月7日 富山大学教授広岡公夫氏他3名による考古地磁気測定のための資料収集が行なわれる。(~8日)
9月23日 石川考古学研究会による遺跡見学が行なわれる。
9月24日 39号窯の下にさらに焚口部分の天井が確認される(43号窯)。
9月30日 今年度の発掘作業を終了し、窯体の補強作業を行なう。

(久生)

38. 戸津4号窯跡灰原出土德利形瓶
39. A地区発掘調査風景

戸 津

発行日 1983年3月31日

編集者 石川県小松市教育委員会
発行 小松市小馬出町10番地

印刷者 鶴川印刷株式会社

